

会場平面図と場内写真から読み解く久留米発明博

西 尾 典 子

はじめに

近代期の日本で開催された博覧会を概観してみると、万国博覧会（以下では万国博と略述する…執筆者注）は開催されることはなかった。しかし、西尾典子（2023a）においてすでにサーヴェイしたとおり、内国博覧会（以下では内国博と略述する…執筆者注）や地方で開催された博覧会などが、ある程度の多様性とヴォリュームを以て展開されていたことが確認できる¹。

これらの博覧会のうち、地方で開催された博覧会に関しては、その総称や全体的な定義さえも道半ばであることが、石上敏（2012）によって指摘されている²。この原因の1つとして、地方で開催された博覧会についての研究蓄積は徐々に図られていってはいるが、質量ともにまだ十分であるとはいえず、抽象化するためのサンプル数が少ないことを指摘することができる³。

この隘路を突破する試みの1つとして、西尾典子（2023b）にて、1918年に福岡県久留米市において開催された全国発明品博覧会（以下では、久留米発明博と

1 西尾典子（2023a）

2 石上敏（2012）、78 - 79頁。

3 西尾典子（2023a）、15頁。近代期の日本において、それぞれの地方で開催された博覧会について検証した論考としては、大貫涼子（2012）、塩原佳典（2012）、小川玲美子（2015）、尾島志保（2016）、大野真由（2016）、佐野実（2021）などが代表的である。これらの研究史の流れとは別に、近代日本の地方都市で開催された博覧会を紹介した論考としては、山路勝彦（2017）もある。

略述する…執筆者注）についての分析を試みた。同論文では、久留米発明博の開催経緯や同博覧会の運営組織について検証した。本稿では、西尾典子（2023b）よりもさらに一步踏み込んで、久留米発明博の会場として実際にどのようなものが用意され、この博覧会が実施されたのかについて検証していきたい。

尚、未然に断っておくと本稿を執筆するに当たっては、年号は和暦ではなく西暦を採用し、資料の引用に当たっては旧字を新字に、仮名の場合には片仮名を平仮名に改めた。加えて、本稿で用いる会場平面図や写真資料の出典は、総て全国発明品博覧会（1918）による。

1. 久留米発明博の会場 一立地と来場者ならびに施設規模一

久留米発明博は、1918年4月15日から5月20日にかけて開催された⁴。最初にこの久留米発明博開催期間中の総入場者数と、その内訳を確認しておこう。35日間にわたり開催された久留米発明博の来場者数は、合計で13万3,298名であった⁵。内訳をみると、大人が7万9,856名、小児が2万8,237名、団体が2万6,205名という構成になっていた⁶。

この博覧会の会場は、どのようなものであったのであろうか。会場には、久留米市の東方に位置する三井郡南薫西町（現・久留米市南薫町）の元三井高等小学校跡地と、南薫尋常小学校の校地の一部が選定された⁷。この会場の敷地の総面積は、6,500坪（約2.15ha = 2万1500m²）であった。

会場の工事は、1918年1月23日に着手された。この工事を行うに当たっては、博覧会の工務部が担当部署となった⁸。博覧会工務部は、博覧会の本部や地権者た

4 全国発明品博覧会（1918）、「凡例」。

5 全国発明品博覧会（1918）、41頁。

6 全国発明品博覧会（1918）、41頁。

7 西尾典子（2023b）、106頁。全国発明品博覧会（1918）、13頁。

8 全国発明品博覧会（1918）、3頁。

ちなどとも協議を重ねて、会場の成案を作成した。そして公に入札を行い、業者を選定したうえで、地鎮祭を行うと同時に会場の建築に着手したのであった⁹。

完成した久留米発明博の会場は、第1会場と第2会場の2つの会場からなるものであった¹⁰。このうち、第1会場の施設の規模をまとめたものが、表1である。

表1 各施設の規模

| 施設名 | 間取り(間) | | 総坪数 |
|--------|--------|----|-----|
| | 横 | 縦 | |
| 本館 | 5.5 | 30 | 165 |
| 器械館 | 4.5 | 10 | 45 |
| 地方物産館 | 4 | 14 | 63 |
| 実演所 | 2 | 60 | 120 |
| 電気館 | 4.5 | 10 | 45 |
| 事務所 | | | 13 |
| 郵便局出張所 | | | 7 |
| 出札所 | | | 7 |
| 警察消防詰所 | | | 8 |
| 救護班詰所 | | | 4 |

出典：全国発明品博覧会（1918）、14頁をもとに作成。

表1によると、第1会場には少なくとも、本館、機械館、地方物産館、実演所、電気館、事務所、郵便局出張所、出札所、警察消防詰所、救護班詰所の全10施設が建てられていたことが分かる。

第1会場の総坪数は、477.5坪（約1580㎡）であり、このうち本館が165坪（約546.2㎡）と最も大きいものであった。これについて、実演所に120坪（397.2㎡）、地方物産館に63坪（約208.5㎡）、器械館（後述の会場平面図では「機械館」と表記…執筆者注）と電気館にそれぞれ45坪（約149㎡）の面積が宛がわれていたことが分かる。

⁹ 全国発明品博覧会（1918）、14頁。

¹⁰ 全国発明品博覧会（1918）、14頁。

後述する会場の地図を見ると、第1会場には他にも、協賛会の接待所と事務所、第一売品館、第二売品館、特売店があり、個人の経営する2,000坪（6620㎡）余りの建物や、ピヤホール、飲食店などが設けられたことが確認できる。これら会場に設けられた各施設の詳細については、次節以降に譲る。

第2会場は、発明品博覧会の付帯事業として開催された時局品展覧会と、久留米市内の学校に通っている児童生徒たちが製作した作品の展覧会の会場となった¹¹。第2会場については、「南薫尋常小学校々舎の一部二階建二百七十坪を以て之に充当したるを以て其総計建物の坪数は、実に七百四十七坪半」であったとの記述が残されている¹²。しかしながら、個別のブースについての詳細なデータは、管見の限り存在していない。

ここでは、久留米発明博の会場に建設された建築物の装飾について言及しておく。久留米発明博の建築物には、共通点が存在していた。それは、建築された施設内外の装飾が、こだわり抜かれたものであったという点である。

まず、施設の外観は会場となった久留米市の自然の風光とも、調和のとれた装いとなるよう意識されて設計されていた¹³。会場の東側には蒼々たる高良山を望み、北方には滔々たる筑後川が流れている。これらを借景とした会場内には、老樹が鬱蒼としており自然の豊かさを間近にするものであった。

会場に配置された各館の外装には、煉瓦を意識した代赭色^{たいしき}が採用された。また投光灯も配備され、夜間には各館を四方から照らして「燐然たる不夜城」を「現出」させる演出などが施された¹⁴。外装を勇壮にする一方で、館内の装飾については、清楚で気品のある趣が意識されたのであった¹⁵。

11 全国発明品博覧会（1918）、17頁。

12 全国発明品博覧会（1918）、14頁。

13 全国発明品博覧会（1918）、18頁。

14 全国発明品博覧会（1918）、18頁。

15 全国発明品博覧会（1918）、18 - 19頁。

この久留米発明博の開場時間は、原則として午前9時から午後4時であった¹⁶。しかし、夜間の部が開催される際には、一度閉場した後に、午後6時から午後10時まで開場された。

次節以降では、会場の地図をもとに、久留米発明博の会場について、さらに詳しく分析していく。

2. 第1会場の様相 —久留米発明博会場—

全国発明品博覧会（1918）には、付図として「全国発明品博覧会附時局展覧会場平面図（以下、会場平面図と略述する…執筆者注）」が掲載された（図1）。本節以降では、この会場平面図をもとに久留米発明博の会場に設置された施設について分析していく。

ここで久留米発明博取材した、1人の記者のことを紹介しておきたい。その記者の名前は、N記者という。N記者は、久留米発明博をその目で見て、雑誌に記事を残した人物である¹⁷。

久留米発明博開催から久しくなった現在では、この会場を歩いて見て回るのは不可能である。そのため本節では、実際に久留米発明博の会場へ来場したN記者の目と、その叙述の力も借りて、同博の会場について分析していきたい。

・ 正門

図1を確認すると、会場の西側に当たる図の中央下部に正門が確認できる。図1によると、この正門の正面につちやたび広告門とも記されている。なぜ2つの門が存在するのか、これはどういうことなのか。

¹⁶ 全国発明品博覧会（1918）、8頁。

¹⁷ N記者（1918）、102 - 104頁。

N記者がの取材によると、「会場の大体の輪郭」のうち、正門に関するものは次のように描かれている。

南薫町を西に電鉄国道停留所を過ぎると街道に跨つて巍然たる広告門が聳えている。是が緋と共に久留米を代表とするつちや足袋の建設で、それから正門を潜つて進むと右側が入らっしゃい〜の入場券発売所、之と向き合つてモン〜チリン〜の自動電話その突き当りが本館¹⁸

この叙述によると、久留米発明博の正門の前には、街道を跨いで、つちや足袋の大型広告が掲載された門が建設されていたことが分かる。

そして、正門の右側には入場券（資料によると「観覧券」であるため、以下では観覧券と記述する…執筆者注）発売所が、それと向き合つて自動電話が設置してあったという。このことから、図1の正門と本館の間にある札売所という施設は、観覧券を販売する施設であったことが確認できる。来場者はここで観覧券を購入して、久留米発明博を観覧することとなる。図1を確認すると、会場東側の裏門と物産館の間にも、札売所が置かれていたため、こちらでも観覧券の購入が可能であった。

なお、6歳未満の者は観覧券を購入する必要はなかった¹⁹。来場者は博覧会場に滞在している間中、この観覧券を携行する必要があり、退場する際に守衛に還付することも定められていた。

・本館と近接施設

図1を確認すると、正門から入場した先には本館がある（写真1）。本館の正

18 N記者（1918）、103頁。

19 全国発明品博覧会（1918）、8頁。

門側にある長方形の部分は、花壇であり、この花壇には「各種珍奇の植物」が植えられていた²⁰。本館には、消防詰所と警官詰所が併設されており、これらと並んで景品引換所が設置されていた²¹。



写真1 本館前の光景

N記者の取材によると、この景品引換所は協賛会が設置したもので、久留米発明博の「湧き立つ人気を更に沸騰させるため」、35日間の会期中に14回企画された景品デーのための施設であった²²。景品交換所は、「福運者が手を伸べて福運を頂戴する所」であり、景品には「債券其他山の如き景物」が陳列されていたという²³。ここから景品デーには、福引が開催され、当たったものは景品交換所にて「係員諸氏が脳漿を絞つて」考案した景品とくじを交換したことが分かる。

さて、本館についてである。本館には、久留米発明博への出品物の多くが展示された（写真2・写真3）。これらの出品物は、発明品の数々であり、日本全国で出品の勧誘を行って集められたものであった²⁴。

20 全国発明品博覧会（1918）、18頁。

21 N記者（1918）、103頁。

22 N記者（1918）、103頁。

23 N記者（1918）、103頁。

24 全国発明品博覧会（1918）、15頁。



写真2 陳列の品々

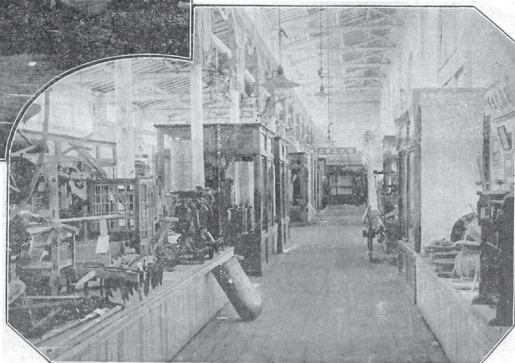


写真3 陳列の品々

表2 出品人員及数量

| | |
|--------|--------|
| 専売特許品 | 195種 |
| 実用新案品 | 159種 |
| 意匠登録品 | 31種 |
| 出品種数総計 | 406種 |
| 出品人員 | 401人 |
| 出品点数 | 38778点 |

出典：全国発明品博覧会（1918）、15頁をもとに作成。

久留米発明博の出品に関して詳細をまとめたものが、表2である。表2によると、久留米発明博全体での出品人員は401名であり、出品種別の総計は406種類で、出品点数は合計3万8,778点に上った²⁵。出品物の種類には、専売特許品・実用新案品・意匠登録品などがあった。これらの出品物の内、92名の出品者が出品した

²⁵ 全国発明品博覧会（1918）、15頁。

1,357点の発明品が、本館へ展示された²⁶。本館内の陳列品の売上高は、992円80銭であった²⁷。

ここで、これらの出品物がどこから来たものであったのか確認しておこう。出品者を府県別に出品者の人数をまとめたものが表3である。表3をみると、出品者は福岡県が184名と最も多くかった。府県単体でみると、福岡県に次いで東京府から154名が出品者として参加していた。

全体の数値をみると、福岡県以外の九州各県も、佐賀県から12名、熊本県から6名、大分県から5名、長崎県から8名、鹿児島県から4名の出品者が参加していたことが分かる。さらに表3をみていくと、九州地域以外の各府県からも、それぞれ1～4名ほどの出品者がいたことが確認できる。

表3 地域別出品者数

| 九州地方 | | 関東甲信越地方 | | 東北地方 | | 中部地方 | | 関西地方 | | 中国地方 | | 四国地方 | |
|------|-----|---------|-----|------|----|------|----|------|----|------|----|------|----|
| 県名 | 人数 | 県名 | 人数 | 県名 | 人数 | 県名 | 人数 | 県名 | 人数 | 県名 | 人数 | 県名 | 人数 |
| 福岡県 | 184 | 東京府 | 154 | 宮城県 | 1 | 愛知県 | 1 | 京都府 | 2 | 鳥取県 | 1 | 徳島県 | 1 |
| 佐賀県 | 12 | 埼玉県 | 2 | | | 静岡県 | 1 | 兵庫県 | 4 | 島根県 | 1 | 愛媛県 | 1 |
| 熊本県 | 6 | 群馬県 | 1 | | | 岐阜県 | 1 | | | 岡山県 | 1 | | |
| 大分県 | 5 | 千葉県 | 2 | | | | | | | 広島県 | 1 | | |
| 長崎県 | 8 | 神奈川県 | 2 | | | | | | | 山口県 | 3 | | |
| 鹿児島県 | 4 | 山梨県 | 1 | | | | | | | | | | |
| | | 長野県 | 1 | | | | | | | | | | |

出典：全国発明品博覧会（1918）、15 - 16頁をもとに作成。

・庭園と噴水塔（写真4）

図1を確認すると、本館の裏手には庭園が設えられていた。同図から、庭園には花壇と噴水が設置されていたことも分かる。本館の背面には、大円形の人工池が造営されており、そこに噴水塔も設置された。この叙述では色彩や雰囲気は伝わらないので、N記者の取材記事を引用しておこう。

26 全国発明品博覧会（1918）、16頁。

27 全国発明品博覧会（1918）、16頁。

本館を裏に抜けると円形一郭の大広場、手近な所は緑（ママ）を瀟洒な蛇籠で編んだ噴水の設備、噴水の周りは円形の花壇で取り巻いてゐる。紅、白、朱、黄色とり一色の花が今を盛りと妍を競ふて春の光に映発する美観は会場更に一段の艶やかさを添えるだらふ²⁸

本館の裏手には大広場が造設され、噴水は蛇籠で縁取られた瀟洒な装いであったことが分かる。噴水の周りには、花壇が置かれ暖色系の花々で彩られていたのであった。その花々が、春の陽射しに映えていたようである。そしてこれらの花壇の左右には、「相對して植物陳列場」が設置された²⁹

さて、技術史的な側面から噴水に着目しておこう。近代期に日本国内で行われた博覧会を振り返ると、1877年に東京の上野で開催された第1回内国勸業博覧会（以下では、「内国博」と略述する…執筆者注）には、すでに噴水塔が登場していた³⁰。

この内国博会場に設置された噴水塔は、ただ単に会場の装飾のみを目的としたものではなく、「失火消防の用に備へ或は花卉に灌漑し或は觀者の為に炎熱を退け塵埃を収」める役割も果たしていた³¹。会場の装飾に華を添える噴水塔は、保安や安全管理上からみても、実利的な効果を有する多機能的な存在であった。

図1を確認すると、久留米発明博の会場は噴水塔を中心として、同心円状に様々な施設が建築されていたことが分かる。噴水塔の手前側から見ていくと、まず周りには花壇が設置され、さらにその周りには植物陳列所が配置されていることが分かる。噴水塔の正面は、本館である。この図からも、久留米発明博会場に設置された噴水も、会場の装飾用だけではなく、防火や防塵、灌漑といった多岐に亘る実用性を伴った設備であったといえる。

28 N記者（1918）、103頁。

29 N記者（1918）、103頁。

30 内国勸業博覧会事務局（1877）、39頁。

31 内国勸業博覧会事務局（1877）、39頁。



写真4 噴水塔の全景

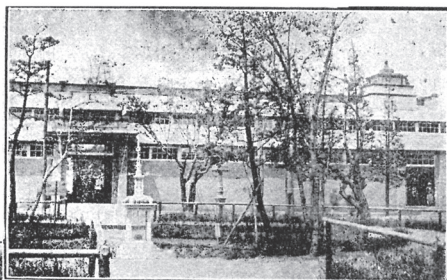


写真5 協賛会接待所

・接待所ならびに協賛会事務所

図1をみよう。庭園を抜けると、協賛会の事務所と接待所がある。協賛会についての詳しい解説は、既に西尾典子（2023b、112頁）でも述べているので、ここではその内容を要約しておく。

協賛会は、博覧会経営部を廃止し分離独立させた組織であった³²。結成された当初の協賛会は、1918年1月24日に久留米市細工町青々館に事務所を構えていたが、図1にあるように事務所と接待所が建設された後は、久留米発明博の会場内に居所を移転した³³。

協賛会は、久留米市を代表する商工業者や姿勢に関与した市会議員を幹部に据えて運営された組織であった³⁴。幹部の陣容を結論から述べておくと、商工業者

32 全国発明品博覧会（1918）、41頁。N記者（1918）、103頁の記事にも同内容の記述が確認できる。

33 全国発明品博覧会（1918）、42頁。

34 西尾典子（2023b）、115頁。

としては久留米絣、籃胎漆器、つちやたび、製菓業などの製造販売業者や三井電気運輸といった鉄道業などの経営者たちであった³⁵。これらの人物に加えて、市会議員もこの会に参加していた³⁶。

この協賛会の事務所や接待所については、写真資料が残っている（写真5）。実際に見学したN記者によると、この建物は「凝りに凝った日本造りの一棟」であったという³⁷。

久留米発明博をさらに盛り上げるためのイベントは、この建物内にて練りに練られたといっても過言ではない。久留米発明博の開催期間中、協賛会は博覧会に地元久留米の人々を総動員するための協賛イベントを度々開催した。それらのイベントには、「中等学生のマラソン競争、十哩選手のマラソン競争、小学生の大競争、中等学生の庭球大会、オールドボイス庭球大会、青年競走大会」や、「景品デー、記念現金搦込餅まき、仕掛花火等の催し（中略）東京出品団の東京デー筑後新聞社の筑後デー」などがあった³⁸。

・電気館

接待所の南側横にある建物は、電気館である。N記者の取材記事では、「其の東（接待所…執筆者注）に呼び物の電気館がある」と紹介されているが、図1をみると電気館は接待所の南側に建設されている³⁹。ではN記者をして、久留米発明博の「呼び物」と言わせしめた電気館はどのような建築物であり、どのような

35 西尾典子（2023b, 113頁）に基づいて、協賛会幹部の人的構成について具体的に概観しておこう。久留米絣の製造販売業からは、国武金太郎が会長に、本村亀太郎が副会長に、中野礼次郎が幹事長に、湯浅寅之助が常任理事に、国武克己と高尾正蔵が常任理事に就任した。また、籃胎漆器の製造販売業からは篠原倍蔵が同会の副会長に就任した。菓子製造業の鶴俊太郎や、つちやたびの経営者である倉田雲平も常任理事として参加している。

36 野村熊三郎の存在が代表的である。

37 N記者（1918）、103頁。

38 全国発明品博覧会（1918）、42頁。

39 N記者（1918）、103頁。

発明品が展示されていたのであろうか。

N記者によると、電気館は「家屋の建築材料を始め家庭用具の総てに到るまで必要品の全部と電気応用の発明品のみを陳列する」施設であった。この電気館へは、9名の出品者が58点を出品した⁴⁰。

ここで写真資料を確認しておこう（写真6）。写真6をみると、電気館は日本建築のお屋敷風の建物であったことが分かる。この屋敷内に着目すると、部屋の中央に照明装置が置かれていること、縁側の天井にも照明器具が吊り下げられて、展示されていることが確認できる。

これらは、電球などを用いた「電気応用の発明品」であったことが推察できる。当該期の新聞報道をみると、「農商務省より貸下げられたる特許の電気に関する発明品」のみが展示されており、「建材建具電熱座布団火鉢をはじめとして点灯

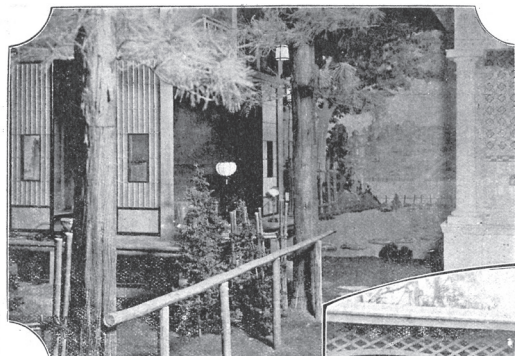


写真6 電気館



写真7 即売品取扱所

⁴⁰ 全国発明品博覧会（1918）、16頁。

の配線の如何に適當に利用すべきかに就て理想を此の模擬の日本座敷に実現した」造りになっていた⁴¹。

・発明水車実演所ならびに発明品即売店、即売店

図1をみると、中央部の接待所と電気館に挟まれて、発明水車実演所という名前の施設が確認できる。加えて、会場の南側に発明品即売所ならびに即売店という名称の施設があったことも、図1から確認できる（写真7）。これらの施設は、後述する各種の売店とは異なり、博覧会が直轄して運営した施設であった⁴²。

実演所と即売店には、久留米発明博の本館に出品されたものと同じものが、販売を目的とした商品として陳列されていた⁴³。実演所や即売所が設立された目的は、本館で展示された発明品の使用方法などを実演して販売することにあつた。

実演所には、9名の出品者が2,368点を出品し、その売上高は8千円に上つた⁴⁴。加えて即売店へは、50名の出品者が26,677点を出品した。即売店の売上高は、1,122円3銭であつた⁴⁵。

久留米発明博で取り扱われた展示品は、それぞれが商品であるという側面をもつていた。しかし、それらの商品が新しく発明されたものであつたため、1つ1つの商品の使用方法が、まだ知られていないものが多かつた。展示品が新しく発明されたものであるため、その使用方法が未だ既知のものではなかつたのである。

このような理由から、久留米発明博の展示品は、一般の観覧者からすれば、その製品の形状や紙に書かれた説明を見るだけ、あるいは口頭での説明を耳にするだけでは、十分に効能や具体的な使用方法が分からないという弊害が生じてしま

41 「本日開会の全国発明品博覧会」『大阪朝日新聞』九州版1918.04.15（神戸大学附属図書館新聞記事文庫による）。

42 全国発明品博覧会（1918）、16頁。

43 全国発明品博覧会（1918）、35頁。

44 全国発明品博覧会（1918）、16頁。

45 全国発明品博覧会（1918）、17頁。

う恐れがあった⁴⁶。そのため、それらを売り物として扱うためには、その使用方法を詳しく理解してもらう必要性があり、そのための場所として実演所が設置されたのであった。

博覧会の側としては、「脚一たび実演所に到れば、其使用方法も又効用も、一目瞭然」となるため、発明品の販売者もそれを購入する消費者も「双方とも多大の利便を得たることゝ信じてこの施設を設置したのであった⁴⁷。ここにも、久留米発明博の開催者たちの工夫を垣間見ることができるのである。

・ビヤホール（写真8）

図1をみると、久留米発明博の会場には、ビヤホールも設置されていた。接待所の周辺に、4軒のビヤホールの存在が確認できる。

ところで日本で最初のビヤホールは、1899年に治外法権の撤廃を記念して、東京市の新橋に設立されたものであったという⁴⁸。このビヤホールでは、ビールのコップ売がなされ、軽食としてサンドウィッチなども提供された⁴⁹。

設立初期の新橋のビヤホールは、物珍しさも手伝って1日当たり300人から500人の来客があり、最も売れた日には1日1000ℓのビールが消費された⁵⁰。このビヤホールの売上げは、漸次落ち着いて行ったようで、1日に100ℓ程が消費されるようになっていった。新橋のビヤホールの経営が成功したことを受けて、これを模倣したビヤホールや、お手軽西洋一品料理店、路上の屋台店などの類似の飲食店が乱立することとなった⁵¹。

それから9年後の1908年頃には、東京市内のビヤホールの軒数は、200軒ほど

46 全国発明品博覧会（1918）、35頁。

47 全国発明品博覧会（1918）、36頁。

48 高杉晋（1908）、13 - 14頁。

49 平山鏗二郎（1902）、161頁。

50 高杉晋（1908）、13 - 14頁。

51 平山鏗二郎（1902）、161頁。

まで上っていたという⁵²。大阪においても、1910年段階では、「現今ビヤホールは到るところに多くな」っており、それほど珍しい存在ではなく大衆的なものとなっていた⁵³。ビヤホールは、それだけ大衆向けの需要が高かったのである。ここから、20世紀初頭の日本において、ビヤホールが人気スポットであったことがうかがえる。

そして、久留米発明博の会場にも4軒のビヤホールが準備されたのであった。写真8は、全国発明品博覧会（1918）に掲載された「会場概観」と見出しの付けられた写真資料である。写真8をみると、ビヤホールの屋根にサッポロビールと表記されていることが確認できる。

サッポロビールについてであるが、久留米発明博が開催された1918年には、札幌麦酒株式会社という会社は既に存在していなかった。それというのも、1906年に当時の大手ビール製造会社であった札幌麦酒社、日本麦酒社、大阪麦酒社の3大ビール会社が3社合同を行い、大日本麦酒株式会社が設立されたためであった⁵⁴。

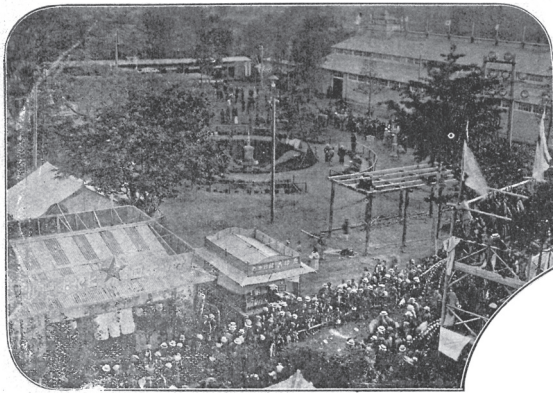


写真8 会場概観

52 高杉晋（1908）、13頁。

53 実業力行会編（1910）、198頁。

54 サッポロビール株式会社広報部社史編集室編（1996）、216頁。

新設された大日本麦酒社では、旧3会社それぞれの主要銘柄の商標を引き継ぎ、サッポロビール、エビスビール、アサヒビールを販売することとなった⁵⁵。このようにビール会社の経営にもそれぞれの歴史的変遷がある。久留米発明博会場のビヤホールで販売されたサッポロビールは、大日本麦酒社の販売したサッポロビールなのであった。

すいこうえん
・萃香園弁当店

図1を確認すると、会場の中央の左上あたりに萃香園が弁当を販売するブースを出店していたことが分かる。現在でも萃香園は、久留米を代表する老舗企業である。この萃香園の創業をめぐっては、いくつかの説がある。

まず1つ目は、現在も稼業している萃香園ホテルのホームページに記載されたものである。これによると、萃香園は1882年に創業したとされている⁵⁶。さらに、萃香園ホテルのホームページ上にある「歴史・沿革」の項目を確認すると、1882年に初代当主である川村安次郎が萃香園の前身となる茶房鶴盟館を有馬藩鷹匠屋敷跡に開店させたことに端を発していたとの記述がある⁵⁷。その後の1887年に、中国経済使節である王治本が鶴盟館を訪れ、その際に萃香園と命名したために、屋号を萃香園に改めたそうである。

一方で、篠原正一（1981）によると、萃香園の創始者である川村安次郎は慶応元（1865）年に三本松町矢野伍平の四男として出生した後、おこんがわ 苧扱川町（現・本町）の川村家の養子となり、降って1883年に櫛原町4丁目に料亭萃香園を開いたとの記述も見られる⁵⁸。この説に基づくと、萃香園の命名は星野武平によるものであったようである。余談であるが、篠原正一（1981）、198頁には、「安次郎は豪放酒

55 サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編（1996）、220頁。

56 <http://www.suikoyen.co.jp/overview/index.html> 閲覧日2023.12.5。

57 <http://www.suikoyen.co.jp/overview/history.html> 閲覧日2023.12.5。

58 篠原正一（1981）、198頁。

脱で、大酔しては客か主人かを忘れる面白い人物であった」とも書かれており、久留米においてその人柄が愛され、そして後々の世でも偲ばれた人物であったこともうかがえる。

このように、萃香園の創立に関しては諸説が存在している。萃香園は、1919年12月に萃香園合名会社となっており、資本金額は5万円であったことが確認できる⁵⁹。

久留米発明博が開催された1918年は、萃香園が開業して99年目に当たっている。萃香園は、久留米の老舗料亭と成長し、博覧会の会場で弁当を提供していたのであった。

・機械館

機械館の情報は、管見の限り資料も見当たらないため、まだ明らかにできることが少ない。現在のところ明らかにできることは、機械館には大阪や東京から出品された出品物が展示され、それらの機械の実演がなされたということである⁶⁰。加えて、機械館へは15名の出品者が計28点を出品し、その売上高は7千円であった⁶¹。

・各種の売店

久留米発明博の会場内には、多様な売店も設置されていた。この売店は、大別すると2種類のものがあつた。それは、博覧会が直接経営に携わつた売店と、協賛会が主体となって運営した売店である。

前者は、実演所の項目で既述した発明品即売店、即売店といった売店である。これらの売店では、商品の使用方法を実演しながら販売がなされたため、実演所

59 武田令太郎編（1922）、23頁。

60 「本日開会の全国発明品博覧会」『大阪朝日新聞』九州版1918.04.15（神戸大学附属図書館新聞記事文庫による）。

61 全国発明品博覧会（1918）、16 - 17頁。

とも呼称された。この博覧会が経営した売店と区別するために、協賛会が運営した後者の売店は普通売店と呼ばれた⁶²。

ここでは、この普通売店に分類された各種の売店について焦点を当てる。普通売店の経営の中核を担ったのは、協賛会である。既述のとおり協賛会は、久留米市の商工業の担い手である実業家グループを中核に据えて組織されていた⁶³。久留米発明博の会場に設置された多様な売店の経営は、久留米市の地元商工業者が中心となって行ったのであった。協賛会は、「第一第二の売店を設け、又別に露店式の一館を造り、多数の出品者ありて、良好の成績を挙げ、其売上額も頗る多額」であったという⁶⁴。

ではここで、普通売店と分類された売店には、具体的にどのようなものがあり、そしてそれらが会場のどのあたりに配置されていたのか確認していこう。図1を確認すると、会場の北の端に、第一売品館と第二売品館が設けられていたことが分かる。第一売品館と本館の間には電気製菓所があり、機械館には鶏料理を販売する店が併設され、少し離れて八角塔の横には煮売店の文字も確認できる。

会場の東側にある裏門の近辺に物産館がある。この物産館へは、115名が3,890点の品々を出品し、その売上高は1万2千円に及んだ⁶⁵。物産館には、筑後の重要物産である緋、大川指物、藍胎漆器、仏壇、木臘などが陳列された⁶⁶。物産館からやや離れたところに、喫茶店なども出店されていたことがうかがえる。

これらの売店について、N記者は「お国の土産は茲で財布の紐を解るべし」と紹介した⁶⁷。

62 全国発明品博覧会（1918）、36頁。

63 西尾典子（2023b）、115 - 116頁。

64 全国発明品博覧会（1918）、36頁。

65 全国発明品博覧会（1918）、16 - 17頁。

66 「本日開会の全国発明品博覧会」『大阪朝日新聞』九州版1918.04.15（神戸大学附属図書館新聞記事文庫による）。

67 N記者（1918）、104頁。

・八角塔

図1の左上に、八角塔の記述がみられる。実は、この八角塔についても、まだその詳細は明らかとなっていない。本稿ではなるべくこの八角塔の実像に迫りたいと考えている。

古賀幸雄監修（2001）によると、博覧会のシンボリックな存在として建設された八角塔は、10階建ての高さ80メートルの塔で、中には演舞場や売店などが入っていたという⁶⁸。図1の記述にされていることをみると、活動写真の会場も設置されていたことが分かる。この他にも、10階への上り口と出口が別々に配置されていたことと、演舞場と活動写真場とは別々に設けられていたことが読み取れる。

しかし、全国発明品博覧会（1918）によると、八角塔は「総高二百尺、建坪約二千五百坪余の六階」建てであったとの記載がある⁶⁹。つまり、八角塔は6階建てで高さは約60.6メートルの建築物であった。ここで、八角塔の高さに注目しておこう。この高さは、当時において日本一の高層建築である凌雲閣に匹敵するものであった。

1918年当時、日本で最も高い建築物は1890年に竣工された東京浅草の凌雲閣であった⁷⁰。この凌雲閣の高さについても諸説あるが、凌雲閣の構造に関して最も詳しい研究は堀口甚吉（1968）である。1890年の竣工以来、東京浅草凌雲閣は、12階建て220尺、すなわち66.7メートルの高さであると巷間ではいわれていた⁷¹。ただし、これは避雷針と地下部分の建物の基礎底面20尺を含めた高さであった⁷²。220尺から基礎底面の高さで避雷針（12尺）の高さまで抜くと、実際の高さは188尺すなわち約57メートルとなる⁷³。

68 古賀幸雄監修（2001）、44頁。

69 全国発明品博覧会（1918）、42頁。

70 最近の凌雲閣に関する研究には、佐藤健二（2016）などもある。

71 堀口甚吉（1968）、811頁。

72 堀口甚吉（1968）、811頁。

73 堀口甚吉（1968）、811頁。

当時においては日本一の高さであった東京浅草の凌雲閣が、実際には200尺にも満たない188尺の建築であったことを堀口甚吉は明らかにした。そして、凌雲閣は八角形の高層建築である⁷⁴。ここから久留米発明博の八角塔は、当時日本で一番構想であった建築物を、強く意識して建てられたものであったといえる。

さてここで、久留米発明博の八角塔について話を戻す。八角塔については、N記者も取材している。

呼び物も大小多々ある中には是は又図抜けて大規模の計画は福岡県保安課に頭痛鉢巻をさせたと云ふ問題の八角塔である。最初の計画は総高さ三十四間平面坪五百十坪、総建坪二千五百坪、各階上売店八十箇所、階下は演舞場、活動写真、絶頂には前記の電気放射灯を取り付けて九州空前の高楼を作り、天空高く豪快の気を吐かふとの予定であつたが、県庁のお役人が実地検査の結果十階建ては危険だからと少々頭を低くしたが、それでも普通家屋七階建て位はあるから素晴らしい。階上遠く筑後平野を俯瞰する快味は天下一品⁷⁵。

これによると、八角塔は建設計画の時点では、実際に建築されたものよりも、もっと高く建設されることが予定されていたようである。当初建設が予定されていた八角塔は総高さ34間とあることから、メートル法に直して換算すると、約61.8メートルもの規模を誇るものであった。当時日本一の高さを誇った凌雲閣よりも、4.8メートルも高い塔を建築することが構想されていたのである。

しかし、安全面などへの配慮から福岡県の役人などから反対されてしまったのであった。これについては、「初め二百四尺の計画なりしも保安課の注意により百八十尺に切り縮めたるも尚危険ありとて其の観覧者の出入りを禁じたる為階下の

74 堀口甚吉 (1968)、811頁。

75 N記者 (1918)、104頁。

演舞場の使用に差問う事となるを以てなりたるを以て階上を八回迄登らせぬ事にして演舞場の仕様は多分許可せらるるならん」との新聞報道もなされていた⁷⁶。

では、実際に建設された八角塔の高さはどうであったのだろうか。完成した八角塔は、10階建てではなく7階建てで、高さも200尺すなわち60.6メートルの建物であった⁷⁷。福岡県が提示した180尺よりも20尺高い結果となったが、これは八角塔が恒久的な建築物ではなく、久留米発明博の会期中35日間建てさえいけばよいものであったので、県の指導には従わず高さを優先した結果であろうと推測できる。

その結果、完成した八角塔は東京浅草凌雲閣よりも3.6メートル高く、当時の日本においては一番の高層建築となった。

八角塔の内部には、売店や演舞場、活動写真、そして屋上には電気放射灯が設置された。ここから、演舞場と電気放射灯について順を追って解説していこう。まずは、演舞場でどのような催しが実際に行われたのかについてである。

階下演舞場は協賛会が特に力瘤を入れて昼夜間断幕なしにお賑やかな所をと云ふ景気、先ず新券が十日間、紺券が十日間、南国美人の色競べ腕競べには花より先に人を酔はす⁷⁸

写真9・写真10・写真11は、実際に余興として演舞場で行われた芸者の興業写真である。演舞場では、新券芸者の千歳舞、紺券芸者の久米舞の興業が行われた⁷⁹。芸者興業のほかにも、地球齋マンマル一行の奇術や、古賀浅組の芝居、梅月小政組の仁和加、橋本組の少女劇などの興業なども間断なく開催された⁸⁰。ここ

76 「本日開会の全国発明品博覧会」『大阪朝日新聞』九州版1918.04.15（神戸大学附属図書館新聞記事文庫による）。

77 全国発明品博覧会（1918）、42頁。

78 N記者（1918）、104頁。

79 全国発明品博覧会（1918）、42頁。

80 全国発明品博覧会（1918）、42頁。

から、新聞報道で懸念された様にはならず、演舞場も無事に使用されていたことが確認できる。この演舞場は、個人が経営したものであった。八角塔の各階には、土産物屋などが置かれた。

写真9 余興芸者の手踊

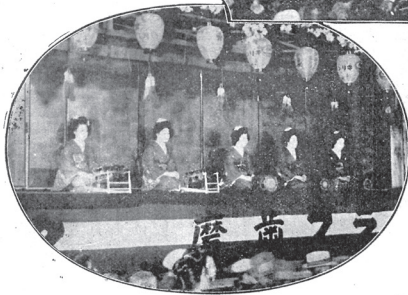


写真10

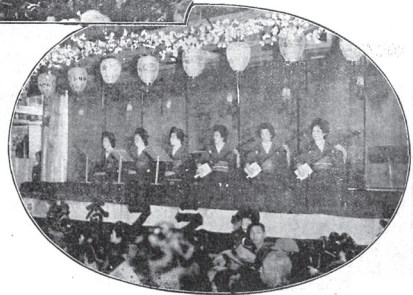


写真11

続いて、八角塔の7階の更に上の階となった屋上に設置された電気放射灯に注目しておきたい。N記者の取材記事を引用しておこう。

同博覧会が本邦に於ける博覧会の設備上に一大新記録を残さうと計画してゐる電気放射器である。是は嘗て桑港博覧会に異彩を放つたもので、高さ二百四尺の八角塔の頂上に取り付けて夜間は十里四方を照射すると云ふから、先ず福岡、佐賀、大牟田、吉井の各方面までも探照灯の如に照らすことになる。⁸¹

81 N記者（1918）、103 - 104頁。

八角塔の屋上に取り付けられた電気放射器は、桑港博覧会で異彩を放った演出を模倣したものであった。

桑港博覧会とは、1915年2月20日から12月4日にわたる288日間、米国サンフランシスコ市において開催されたパナマ・太平洋万国博（以下では桑港万国博と略述する）のことである⁸²。では、桑港博覧会で異彩を放ったという電気放射器とはどのようなものであったのだろうか。桑港万国博における光の演出は、それまでの万国博とは一線を画したものであった⁸³。それは何か。この桑港万国博では、夜間の光の演出として電気放射器、すなわちサーチライトが用いられたのである⁸⁴

この桑港万国博の光の演出から着想を得て、久留米発明博においても八角塔の屋上にサーチライトを取付け、夜間は久留米市の四方を照らす演出を行ったのであった。その光線は、35日の間日本一となった高樓から40キロ四方に及んだ。35日間という短い期間であったが、久留米に日本で一番高い塔が築かれ、その屋上より筑後から九州の夜を照らしたのであった。

3. 第2会場の様相 一時局品展覧会場ならびに学術展覧会場

既述のとおり、南薫尋常小学校の一部に置かれた第2会場は、久留米発明博の付帯事業として敢行された時局品展覧会（以下、時局品展と略述する…執筆注）の会場となった（写真12）⁸⁵。第2会場の場所は、図1の南側に位置する教育館と記された建物である⁸⁶。この第2会場には久留米市内の小学校や中学校、商業学校、女学校ならびに私立学校の児童生徒たちの学術展覧会（以下、学術展と略

82 山本光雄（1970）、279 - 280頁。

83 小西正二（1915）、74頁。

84 久米桂一郎（1916）、2頁。

85 全国発明品博覧会（1918）、17頁。

86 N記者（1918）、104頁。

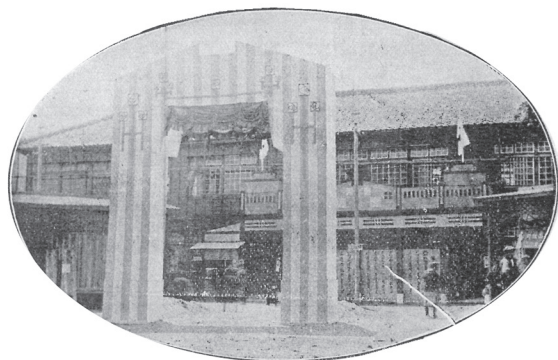


写真12 第二会場正門

述する…執筆者注)の会場も併設されていた⁸⁷。本節では、これらについて焦点をあてていく。

先ず、時局品展についてである。時局品展は、文部省・農商務省・逓信省からの多大の援助と出品がなされた⁸⁸。表4は、各省庁から出品された物品をまとめたものである。

表4によると、農商務省は世界各地の市場から種々の物品を収集し、時局品展へ出品していたことが分かる。農商務省は時局品展出展のために、インド、中国、アメリカ、カナダ、インドネシア、ヨーロッパから出品物を集めていた。これらは、「各国の製品重要雑貨」類であり、「一つ一つに製造国と蒐集市場」とが明記されて展示された(写真13)⁸⁹。これらの展示物は、「丁度世界貿易の縮図を見ることが如なもので、商工業は素より、一般の人にも見逃すことの出来ない知識開発一大材料として迎えられてゐる」たようである⁹⁰。また、特許局からも展示物が出品されていた(写真14)。

87 全国発明品博覧会(1918)、18頁。

88 全国発明品博覧会(1918)、17-18頁。

89 N記者(1918)、104頁。

90 N記者(1918)、104頁。



写真13 農商務省の出品

表4 時局品展出展省庁および出品物一覧

| 省 | 出品物 | 点数 | 省 | 出品物 | 点数 |
|------------------|------------|-----|-------------|-----------|----|
| 農 商 務 省 | 英領印度蒐集品 | 36 | 文 部 省 | 戦時通行券 | 1 |
| | 支那市場蒐集品 | 17 | | 戦時旅行券 | 1 |
| | 米国市場蒐集品 | 13 | | 米国募兵広告 | 12 |
| | 加奈陀市場蒐集品 | 30 | | 募債公告 | 12 |
| | 蘭領印度市場蒐集品 | 38 | | 赤十字広告 | 3 |
| | 欧州市場蒐集品 | 21 | | 食物節的警告 | 3 |
| | 小計 | 155 | | 空中戦 | 3 |
| 文 部 省 | 欧州戦乱写真 | | | 陸戦 | 5 |
| | 陸戦 | 54 | | 戦地雑感 | 18 |
| | 海戦 | 25 | | 独逸及澳太利 | 12 |
| | 航空戦 | 22 | | 交戦国の首脳及幹部 | 3 |
| | 塹壕戦 | 9 | | 英吉利 | 4 |
| | 毒瓦斯戦 | 10 | | 戦具及び武器 | 7 |
| | 戦地雑感 | 63 | | 軍国の国民 | 13 |
| | 赤十字 | 8 | | 伊太利 | 7 |
| | 戦具と武器 | 30 | 戦地作業 | 4 | |
| | 交戦後の首脳及其幹部 | 21 | 雑 | 24 | |
| | 戦時絵葉書 | 21 | 小計 | 266 | |
| | 戦時切符類 | 2 | 逓 信 省 | 通信沿革油絵額 | 7 |
| | 戦時紙幣 | 1 | 古切手応用絵葉書 | 2 | |
| | | 小計 | 9 | | |

出典：全国発明品博覧会（1918）、17 - 18頁をもとに作成。

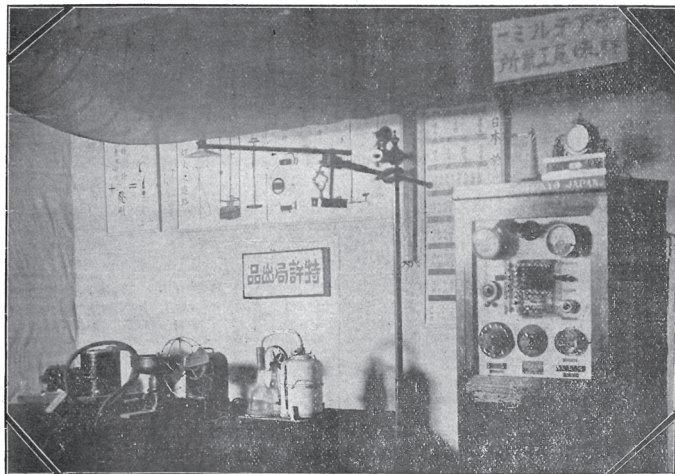


写真14 特許局出品

文部省は、様々な写真を展示した。その合計は、398点に及んだ。表4をみるとこれらの写真は、欧州大戦に関係するものが殆どであったということが分かる。これらの写真は東京教育博物館からの出展であった⁹¹。

また、通信省からは通信沿革油絵と古切手応用の絵葉書が出展されたことが分かる（写真15）。

加えて、この時局品展には、南洋貿易株式会社・三越呉服店児童研究会・久留米捕虜収容所からも多数の出品がなされた⁹²。南洋貿易株式会社は、南洋の産物や風景画など合計40点を出展した（写真16）。具体的には、「大小三十種の珍奇な貝殻を始め、織物、装飾品、団扇、椰子細工、石細工、木細工など」や風景を描いた油絵など、いずれも南洋の独特な風土を感じさせる展示であった⁹³。

91 N記者（1918）、104頁。

92 全国発明品博覧会（1918）、18頁。

93 N記者（1918）、104頁。

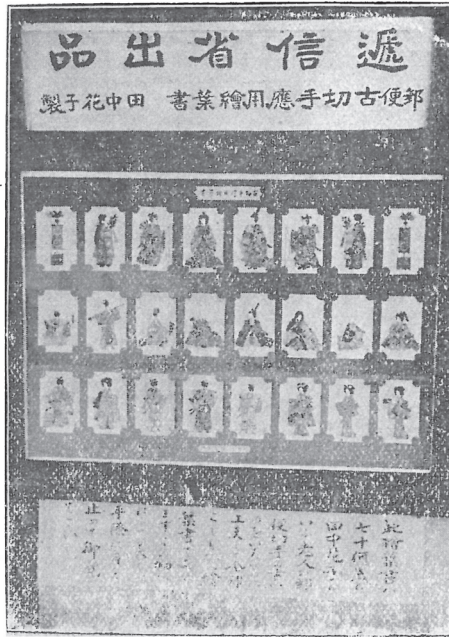


写真15 通信省出品田中花子古切手応用繪業書

三越呉服店児童研究会からは、「英、米、仏、独、露各国児童の玩具」が⁹⁴、計52点出展された（写真17）⁹⁵。久留米俘虜収容所からは、俘虜の製作品が合計41点出展された（写真18）⁹⁶。この他には、田中恒三郎より田中久重が作成した万年時計も展示された（写真19）⁹⁷。N記者によると、これ以外にも島津製作所から教育用の諸機械も出展されていたという⁹⁸。

94 N記者（1918）、104頁。

95 全国発明品博覧会（1918）、18頁。

96 全国発明品博覧会（1918）、18頁。

97 全国発明品博覧会（1918）、18頁。

98 N記者（1918）、104頁。

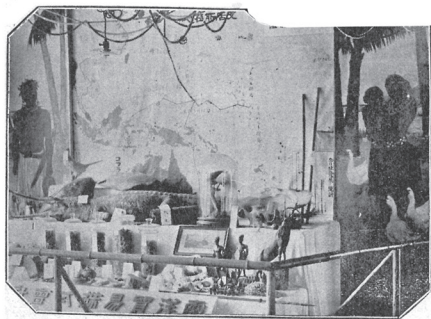


写真 16 南洋貿易株式会社出品



写真 17 東京三越の出品



写真 18 独逸俘虜の出品

続いて、学術展についてである。学術展には、教育学術品が3,533点、洋画が220点出展された。教育学術品の展覧会は、5月4日まで開催され、翌5月5日からこれに代わって洋画の展覧会が開催された⁹⁹。久留米市は、発明家の田中久

⁹⁹ 全国発明品博覧会（1918）、18頁。

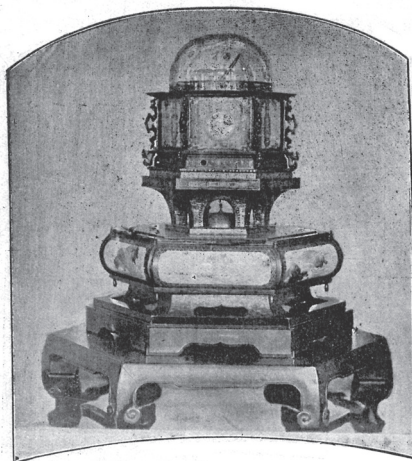


写真19 田中久重翁の万年時計

重を輩出した町として有名であるが、洋画家の青木繁や坂本繁二郎の出身地でもあり、美術教育もまた盛んであったことがうかがえる¹⁰⁰。

おわりに

はじめにでも述べたとおり、地方で開催された博覧会についての研究は今のところ道半ばである。これは換言すれば、研究が積み重ねられている真っ最中だということである。本稿の大きな目的は、地方で開催された博覧会がどのようなものであったのか、少しでも解明の徒を進めていくことにある。そのため本稿では、1918年に開催された久留米発明博に焦点を当て、会場としては実際にどのようなものが用意され、この博覧会が運営されたのかについて検証した。

100 篠原正一（1981、32 - 33頁）によると、青木繁は1882年に久留米市荘島町出身のロマン派画家である。加えて篠原正一（1981、265 - 266頁）によると、坂本繁二郎は青木繁と同じく1882年に生まれた久留米市京町出身の画家であった。青木繁と坂本繁二郎の両名は、日本の近代美術史を飾った人物である。

第1節では、久留米発明博の会場にはどのようなものが準備され、その会場内にどのような規模の施設が建築されたのかについて概観した。結果として、久留米発明博の会場として、第1会場と第2会場が準備されていたことが確認できた。この2つの会場は、第1会場が久留米発明博の会場として使用され、第2会場は博覧会の付帯事業である各種の展覧会の会場として使用された。

第2節では、2つあった会場のうち、第1会場がどのようなものであったのかについてフォーカスした。分析に当たっては、久留米発明博の会場平面図（図1）や同博覧会の写真資料を用い、加えて実際に博覧会に訪れて取材した記者の見聞録などを組み合わせて検証し、博覧会場がどのようなものであったのかを具体的に明らかにした。

第3節では、第2会場で開催された久留米発明博の付帯事業であった時局品展と学術展に焦点を当てた。

時局展には、中央官庁である農商務省・文部省・逓信省から出展がなされたことが確認できた。加えて、南洋貿易株式会社・三越呉服店児童研究会・久留米捕虜収容所・島津製作所などからも様々な出品があった。また、第2会場には田中久重作の万年時計が展示されていた。西尾典子（2023b）でも述べたとおり、久留米発明博の開催に至っては、久留米出身の発明家である田中久重の存在が強く意識されていた。その田中久重の製作した万年時計が教育館に展示されたことは、注目しておく必要がある。

学術展には、久留米市内の学校に通う児童生徒の制作した作品などが多く出展された。児童生徒の作品が展示されていれば、当然その家族や近親者は展覧会に参加することが考えられ、この学術展は久留米発明博への市民動員の一端を担っていたといえる。

本稿の分析を通じて、燦然たる久留米発明博35日間の軌跡を可視化できたのであれば幸いである。

参考文献

- 石上敏（2012）「博覧会の諸相」『大阪商業大学商経学会』7 - 4
- N記者（1918）「共進会及博覧会」日本之関門社『日本の関門』3
- 大野真由（2016）「明治七年における若松博覧会」『駒沢史学』86
- 大貫涼子（2012）「地方博の変容（序論）」『國學院大學博物館學紀要』37
- 小川玲美子（2015）「1930年代金沢の観光都市への転換」『デザイン理論』65
- 尾島志保（2016）「地方博覧会と観覧者層」『富山市民俗民芸村報』2
- 久米桂一郎（1916）「桑港博覧会の建築及建築装飾」建築工芸協会『建築工芸叢誌』第2期第21冊
- 古賀幸雄監修（2001）『目で見る久留米・筑後・八女の100年』郷土出版社
- 小西正二（1915）「桑港博覧会概況」農商務省商品陳列館編『貿易時報』2 - 9貿易時報発行所
- サッポロビール株式会社広報部社史編纂室編（1996）『サッポロビール120年史』サッポロビール株式会社
- 佐藤健二（2016）『浅草公園凌雲閣十二階』弘文堂
- 佐野実（2021）「明治初期の博覧会政策にみる地方社会の多様性と序列化」『21世紀アジア学研究』19
- 塩原佳典（2012）「明治初年台における地方博覧会の歴史的意義」『日本歴史』768
- 篠原正一（1981）『久留米人物誌』久留米人物誌刊行委員会
- 実業力行会編（1910）『無資本実行の最新実業成功法』樋口福三郎・樋口源次郎
- 全国発明品博覧会（1918）『久留米市開催全国発明品博覧会記念帖』久留米市
- 武田令太郎編（1921）『新築記念誌』久留米商業会議所
- 高杉晋（1908）「ピヤホールの話」理財新報社『実業世界』2 - 13
- 内国勸業博覧会事務局（1877）『明治十年内国勸業博覧会場案内 改正増補』
- 西尾典子（2023a）「近代日本の博覧会に関する研究と課題」『ビジネス研究』8
- 西尾典子（2023b）「1918年の全国発明品博覧会に関する分析」『商学研究（久留米大学）』29 - 1
- 平山鏗二郎（1902）『東京風俗志』中 富山房
- 堀口甚吉（1968）「浅草12階凌雲閣の建築について」日本建築学会『大会学術講演梗概集（計画系）』
- 山路勝彦（2017）『地方都市の覚醒』関西学院大学出版会
- 山本光雄（1970）『日本博覧会史』理想社
- 「本日開会の全国発明品博覧会」『大阪朝日新聞』九州版1918.04.15

本研究並びに西尾典子（2023b）「1918年の全国発明品博覧会に関する分析」『商

会場平面図と場内写真から読み解く久留米発明博（西尾）

学研究（久留米大学）』29 - 1は、久留米大学の「研究教育活動の活性化支援（副学長裁量研究教育支援）」を受けた「博覧会の出品にみる商学的研究—筑後地域の博覧会・共進会・展覧会を事例として—」の研究成果の一部である。